

第239回 愛知学院大学モーニングセミナー

# 中日ドラゴンズ90周年

なぜ低迷 強竜復活なるか!?

中日スポーツ総局長 西澤智宏

2026年2月10日



# 球団史（草創期）

**1936年1月15日**

**大日本野球連盟名古屋協会（名古屋軍）創設**

**→東京巨人、大阪タイガースに次ぐ3球団目**

**1936年4月29日**

**第1回日本職業野球連盟試合（プロ野球初の公式戦）が甲子園球場で行われ名古屋軍は大東京と対戦し8－5で勝利**

**→東京巨人、大阪タイガース、東京セネターズ、阪急、大東京、名古屋金鯱を合わせた7球団**

# 球団史（戦後～1リーグ時代）



1945年11月23日 終戦の3か月後、日本野球連盟再建の第一歩として11月23日にプロ野球東西対抗試合が神宮球場で開催

1946年 プロ野球が8球団により再開、チーム名が産業軍から中部日本へ改称

1947年 中部日本新聞社、杉山虎之助社長の干支が辰年ということからチーム名がドラゴンズに決定、中日ドラゴンズへ改称

1948年 中日スタジアム（中日球場）完成



# 球団史（2リーグ～初優勝）

1950年 プロ野球が2リーグに分立、セントラル・リーグが巨人、阪神、中日、松竹、広島、西日本、大洋、国鉄の8球団、パシフィック・リーグが阪急、南海、東急、大映、西鉄、毎日、近鉄の7球団

1951年 球団名が中日ドラゴンズから名古屋ドラゴンズへ。  
54年に中日ドラゴンズに改称

1954年 セントラル・リーグ初優勝。杉下茂は最高殊勲選手、最多勝、最優秀防御率、最多奪三振投手に。西鉄との日本シリーズは4勝3敗で日本一に輝く

# 球団史（昭和）

**1974年** 2位巨人とのゲーム差は1厘差、V9を阻止し20年ぶりのリーグ優勝。星野仙一がセ・リーグ初のセーブ王と沢村賞を、松本幸行が最多勝と最優秀勝率の2冠、藤波行雄が新人王を獲得した。ロッテとの日本シリーズは2勝4敗で敗れる

**1976年** 中日球場が改装され名称もナゴヤ球場へ



**1982年** 大洋とのシーズン最終戦で8年ぶり3度目のリーグ優勝を決める。MVPには中尾孝義が選ばれた。日本シリーズは西武と対戦、2勝4敗で敗れる。

**1988年** 星野仙一監督就任2年目で6年ぶり4度目のリーグ優勝を決める、MVPは最優秀救援投手にも選ばれた郭源治、新人王には立浪和義。日本シリーズは西武と対戦も1勝4敗で敗れる

# 球団史（平成）

1994年10月8日 巨人と同率で最終を迎え、史上初の最終戦決戦3-6で敗れリーグ優勝を逃す

1996年10月6日 ナゴヤ球場での公式戦最終戦、1949年4月2日の中日-南海戦に始まり、フランチャイズ球場としての歴史に幕を閉じた。勝った巨人は最大11.5ゲーム差をひっくり返す「メーク・ドラマ」達成





# 球団史（ドーム以降）

- 1997年** ナゴヤドームでの公式戦がスタート。初年度は6位
- 1999年** 11年ぶり5度目のリーグ優勝、日本シリーズはダイエーホークスと対戦し1勝4敗
- 2004年** 落合博満が監督に就任。「10%の戦力底上げ」を掲げ、就任1年目にリーグ制覇。日本シリーズは西武と対戦し3勝4敗
- 2006年** 2年ぶりのリーグ優勝。日本ハムとの日本シリーズは1勝4敗
- 2007年** 2位に終わったが、CSを勝ち上がり、2年連続となった日本ハムとの日本シリーズは4勝1敗と雪辱。53年ぶり2度目の日本一に輝く
- 2010年** 落合監督3度目V。日本シリーズはロッテに2勝4敗1分
- 2011年** 球団史上初の2年連続セ・リーグ優勝を達成。ソフトバンクとの日本シリーズは3勝4敗。落合監督退任

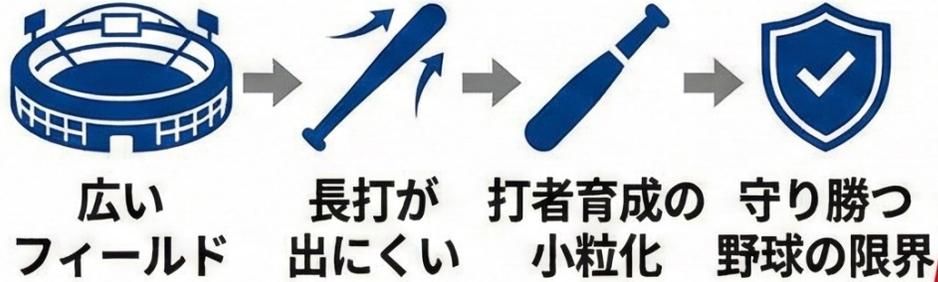
中日の年度別成績																					
年	順位	試合	勝利	敗北	引分	勝率	年	順位	試合	勝利	敗北	引分	勝率	年	順位	試合	勝利	敗北	引分	勝率	
1936 (春夏)		16	7	9	0	.438	1965	2	140	77	59	4	.566	1996	2	130	72	58	0	.554	
1936 (秋)		26	12	14	0	.462	1966	2	132	76	54	2	.585	1997	6	136	59	76	1	.437	
1937 (春)	7	56	21	35	0	.375	1967	2	134	72	58	4	.554	1998	2	136	75	60	1	.556	
1937 (秋)	8	49	13	33	3	.283	1968	6	134	50	80	4	.385	1999	1	135	81	54	0	.600	
1938 (春)	7	35	11	24	0	.314	1969	4	130	59	65	6	.476	2000	2	135	70	65	0	.519	
1938 (秋)	4	40	19	18	3	.514	1970	5	130	55	70	5	.440	2001	5	140	62	74	4	.456	
1939	6	96	38	53	5	.418	1971	2	130	65	60	5	.520	2002	3	140	69	66	5	.511	
1940	5	104	58	41	5	.586	1972	3	130	67	59	4	.532	2003	2	140	73	66	1	.525	
1941	6	84	37	47	0	.440	1973	3	130	64	61	5	.512	2004	1	138	79	56	3	.585	
1942	7	105	39	60	6	.394	1974	1	130	70	49	11	.588	2005	2	146	79	66	1	.545	
1943	2	84	48	29	7	.623	1975	2	130	69	53	8	.566	2006	1	146	87	54	5	.617	
1944	4	35	13	21	1	.382	1976	4	130	54	66	10	.450	2007	2	144	78	64	2	.549	
1946	7	105	42	60	3	.412	1977	3	130	64	61	5	.512	2008	3	144	71	68	5	.511	
1947	2	119	67	50	2	.573	1978	5	130	53	71	6	.427	2009	2	144	81	62	1	.566	
1948	8	140	52	83	5	.385	1979	3	130	59	57	14	.509	2010	1	144	79	62	3	.560	
1949	5	137	66	68	3	.493	1980	6	130	45	76	9	.372	2011	1	144	75	59	10	.560	
1950	2	137	89	44	4	.669	1981	5	130	58	65	7	.472	2012	2	144	75	53	16	.586	
1951	2	113	62	48	3	.564	1982	1	130	64	47	19	.577	2013	4	144	64	77	3	.454	
1952	3	120	75	43	2	.636	1983	5	130	54	69	7	.439	2014	4	144	67	73	4	.479	
1953	3	130	70	57	3	.551	1984	2	130	73	49	8	.598	2015	5	143	62	77	4	.446	
1954	1	130	86	40	4	.683	1985	5	130	56	61	13	.479	2016	6	143	58	82	3	.414	
1955	2	130	77	52	1	.597	1986	5	130	54	67	9	.446	2017	5	143	59	79	5	.428	
1956	3	130	74	56	0	.569	1987	2	130	68	51	11	.571	2018	5	143	63	78	2	.447	
1957	3	130	70	57	3	.550	1988	1	130	79	46	5	.632	2019	5	143	68	73	2	.482	
1958	3	130	66	59	5	.527	1989	3	130	68	59	3	.535	2020	3	120	60	55	5	.522	
1959	2	130	64	61	5	.512	1990	4	131	62	68	1	.477	2021	5	143	55	71	17	.437	
1960	5	130	63	67	0	.485	1991	2	131	71	59	1	.546	2022	6	143	66	75	2	.468	
1961	2	130	72	56	2	.562	1992	6	130	60	70	0	.462	2023	6	143	56	82	5	.406	
1962	3	133	70	60	3	.538	1993	2	132	73	57	2	.562	2024	6	143	60	75	8	.444	
1963	2	140	80	57	3	.584	1994	2	130	69	61	0	.531	2025	4	143	63	78	2	.447	
1964	6	140	57	83	0	.407	1995	5	130	50	80	0	.385	2026	?						

# なぜ低迷 なぜ弱くなった？

- チーム編成の偏り
  - ドーム野球の弊害
- 球団の財政
  - 入場者数の減少、原資の乏しさ
- データ活用の遅れ
  - 選手、指導者、フロントの意識の低さ
- 選手育成の失敗
  - 将来的なビジョンの欠如

# 中日ドラゴンズ 低迷の複合的要因

## 本拠地バンテリンドームのジレンマ



## 編成・補強のミスマッチ



## ドラフト戦略と育成の停滞



## 現場の混乱と采配



深刻な  
得点力不足

長期低迷・Bクラス定着

希望の光：若手台頭と新体制

# ドーム野球って？

両翼100<sup>メートル</sup>、センター122<sup>メートル</sup>、外野フェンス高4.8<sup>メートル</sup>の巨大な器。圧倒的に投手有利で、本塁打は出にくい代わりに、二塁打・三塁打は多くなる。

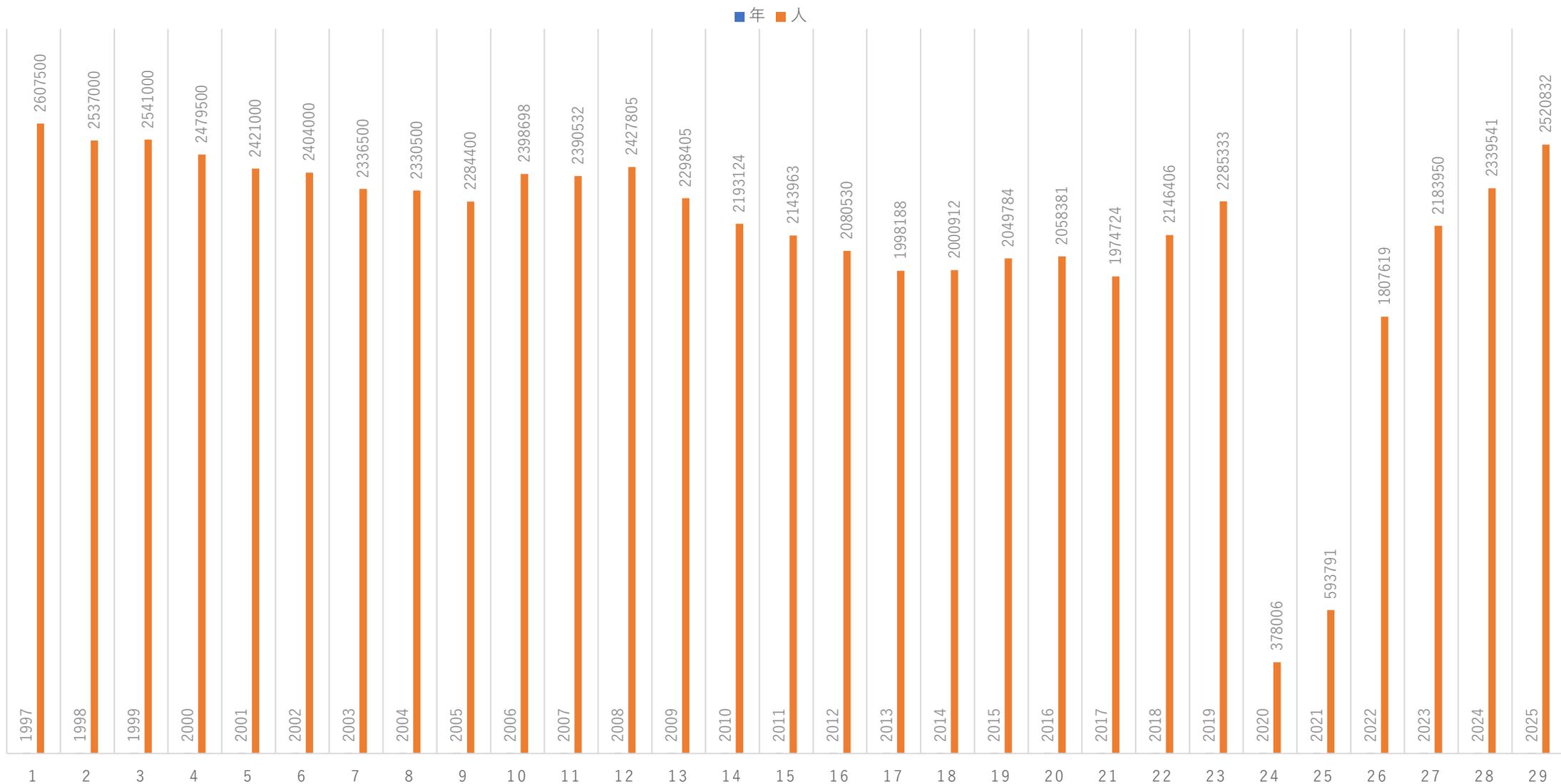
→守りの野球になる。投手力の整備が重要で、野手は俊足・強肩が求められ、長打力よりもヒットを打つ技術、堅実さ。

星野監督の初年度は最下位。そこで大きく切り替えた。大豊・矢野と関川・久慈をトレード。段階的に守れてスピード感のある選手に入れ替えていった。

# 1997年以降のドラフト上位指名

- 31人の1位指名中、19人が投手
- 残り12人中、長距離砲タイプは福留、平田、堂上直、高橋周、石川昂、ブライトの6人。福留とブライト以外は高校生。上位（3位まで）でも、ショーゴ、桜井、福田、古本、石垣、鶴飼、森あたり。  
一方、アベレージ・俊足系の1位指名野手は森岡、中川、野本、根尾。

# ホームゲーム年次入場者数



# 「巨人、中日の監督は難しいんだ。勝つことと、育成の両方を求められるからな」 (星野仙一)

でも、落合監督は勝つことに専念した。その手腕はすごい。徹底する意志もすごい。実際、8年間の在任期間中に球団史上初の連覇を含む4度の優勝に、日本一が1度。誰もが称賛する結果を残した。その反動は・・・

気がつけば、球団のおカネがなくなっていた

→カネに糸目をつけずチーム、スタッフは最高の環境・待遇にした

気がつけば、人気も低下していた

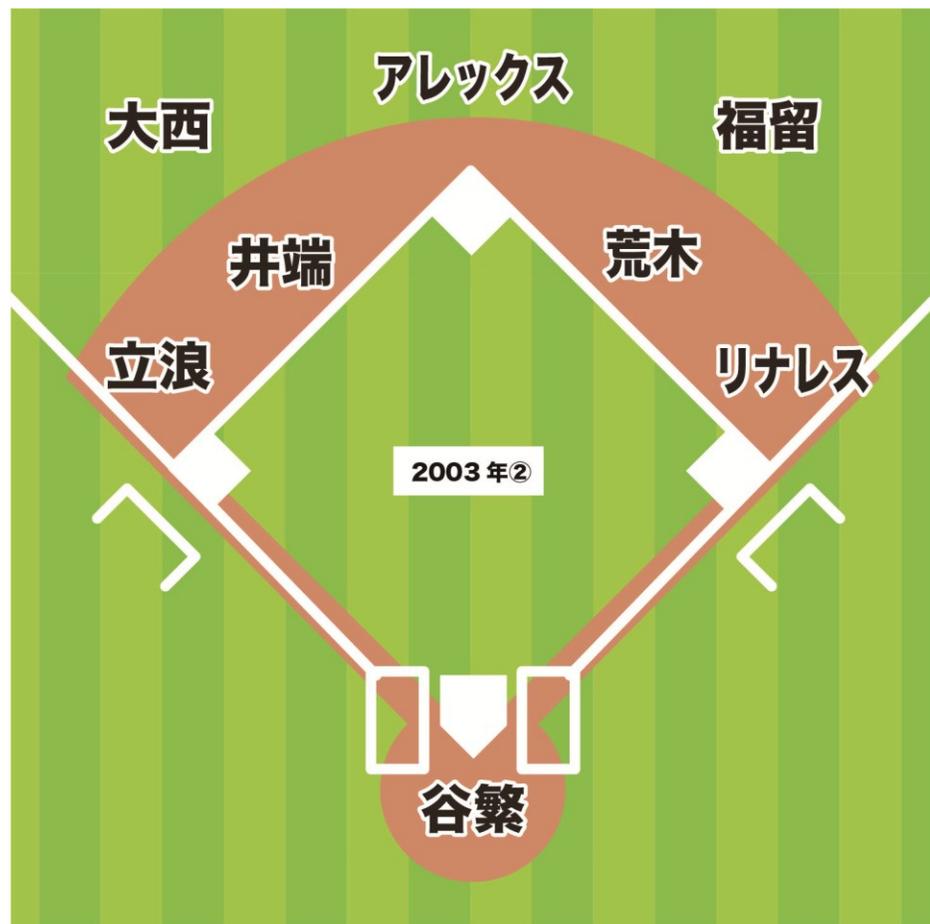
→ファンサービスに消極的。したい選手もできない空気になった

でも、最大の負の遺産は・・・ 「育成の遅れ」

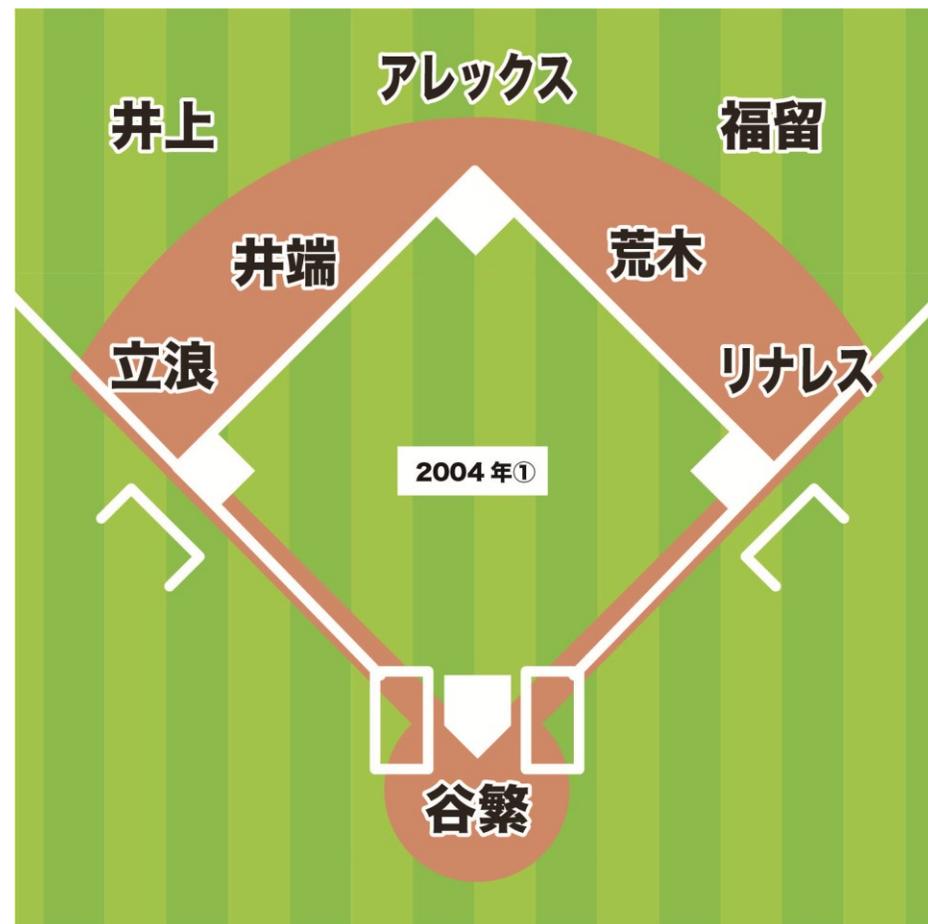
# 落合監督、落合GMが手掛けたドラフト

- 04年 指名11選手は大学生・社会人。1位は樋口、2位に中田
- 05年 高校1位で平田獲得。社会人は吉見
- 06年 高校1位で堂上直。
- 07年 高校1位は赤坂、大社は山内
- 08年 1位は野本
- 09年 1位は岡田。5位に大島
- 10年 1位は大野雄
- 14年 指名9選手（支配下）全員が大学・社会人。1位は野村亮介
- 15年 外れ1位で小笠原。GM時代で唯一の高校生指名

# 2003年（山田監督）と2004年のスタメン比較

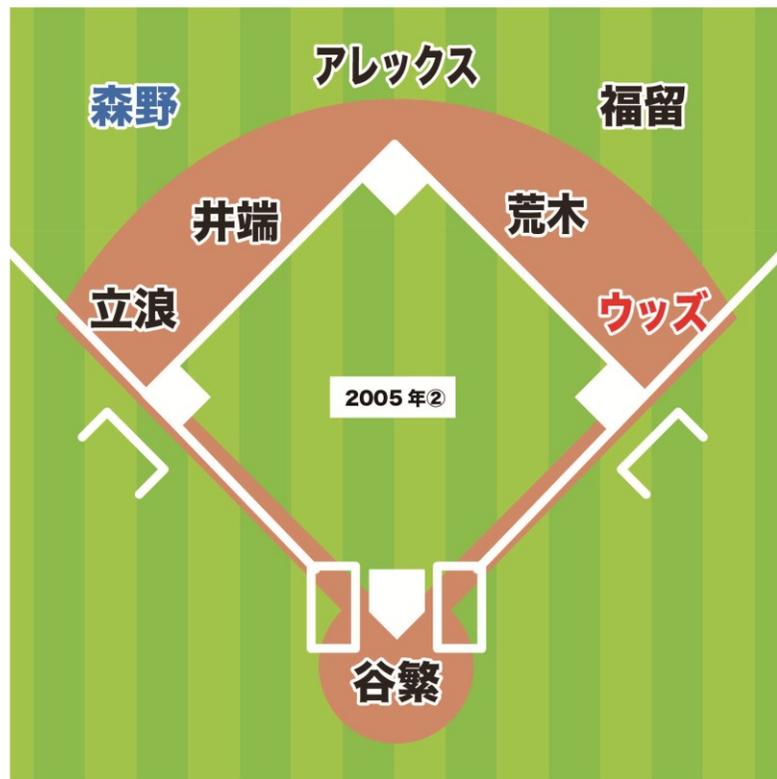


新外国人ケビン・ミラーとの契約  
がまとまらず、アレックス獲得

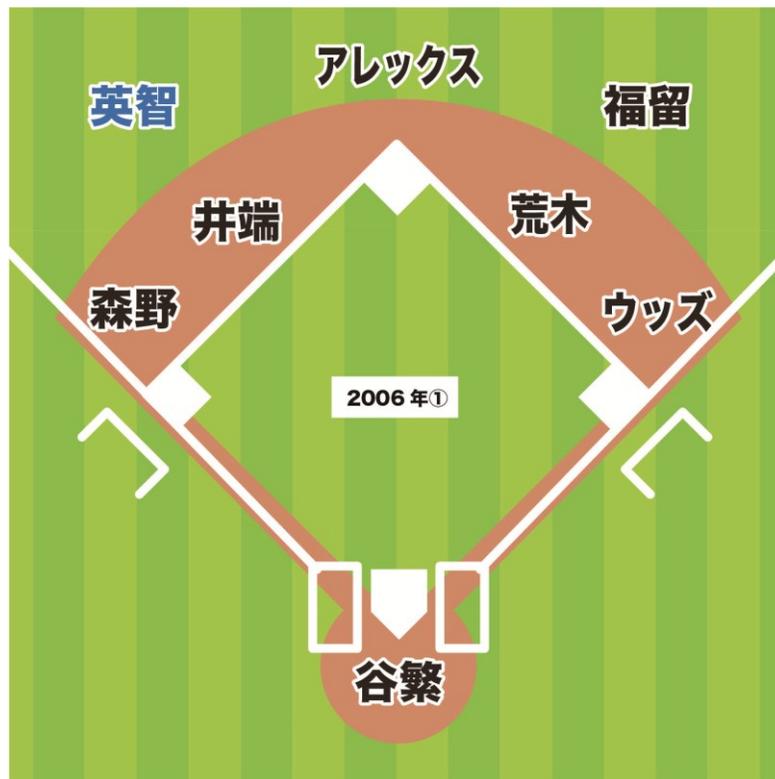


補強なしで勝てる。有言実行

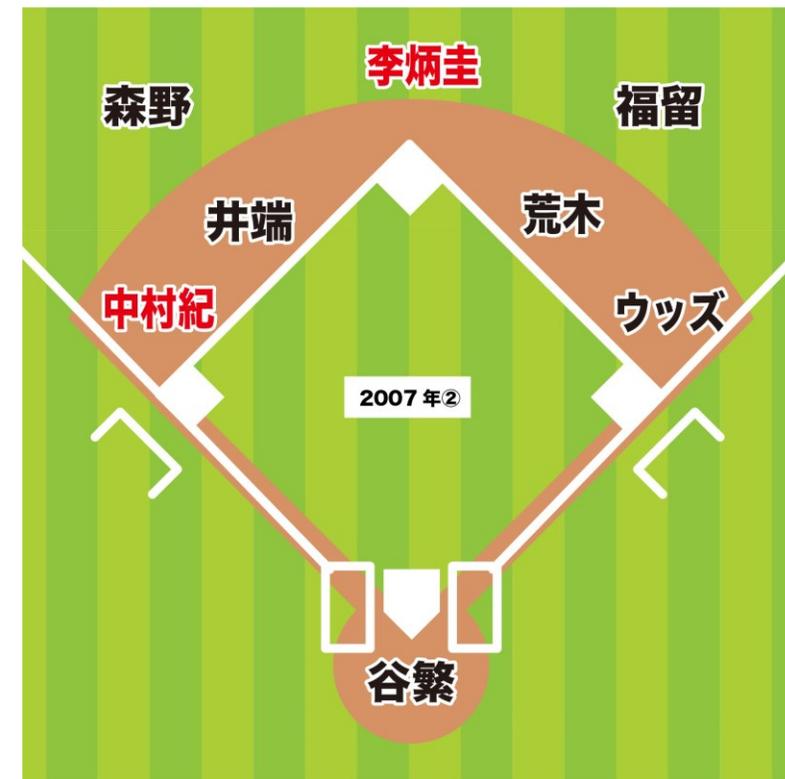
# 2005年以降は・・・



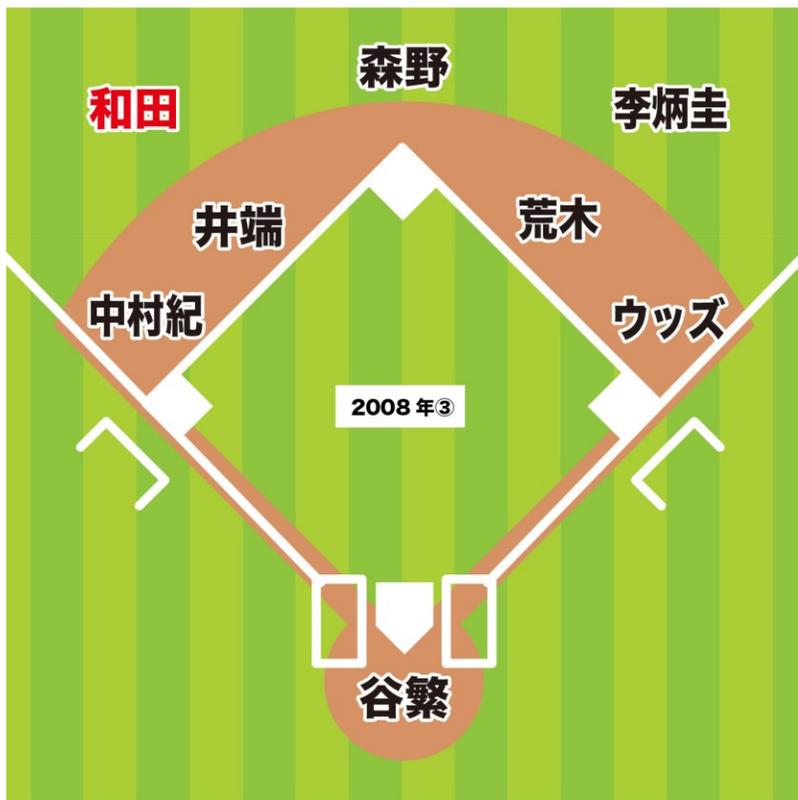
2005年  
横浜のウツズ引き抜き  
森野のスタメン増える



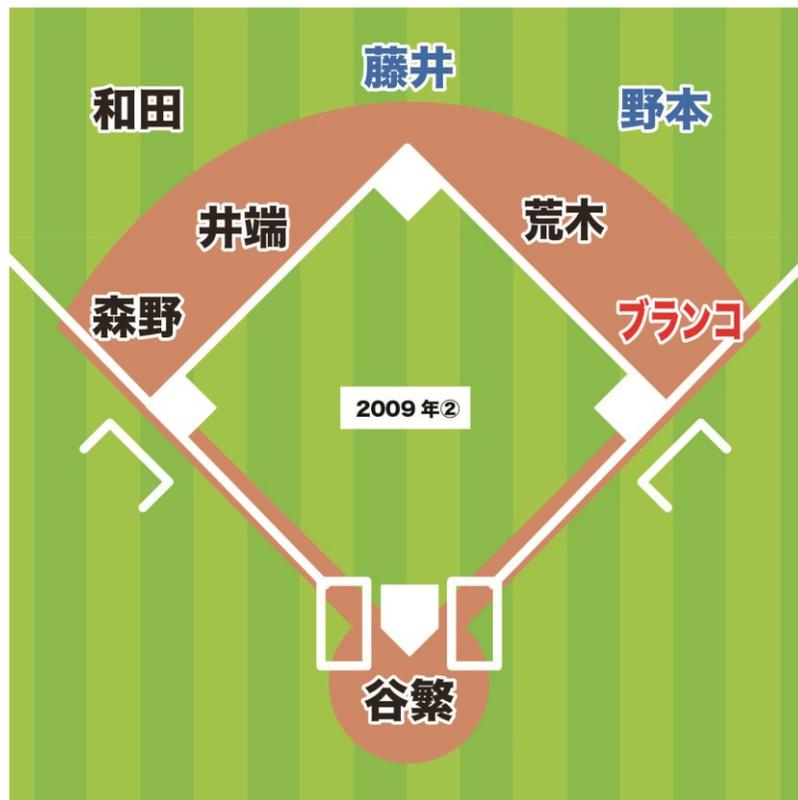
2006年  
森野が三塁スタメン  
英智が台頭も・・・



2007年  
テスト生・中村紀と育成契約  
新外国人に李炳圭



**2008年**  
FA和田を獲得



**2009年**  
新外国人ブランコ獲  
藤井、野本が台頭し  
かかるが・・・



**2010年**  
堂上直の出場増えるが・・・  
大島が定着

# 2011年、結局どうなのか



**6年目 平田が定着！**

**8年間で育った大砲**

→ **森野、平田**

# 埋まらない空白 負の連鎖

- 投手力は整備されているが野手は小粒なまま
- 成績が低迷しはじめると、目先の補強（即戦力候補の投手・ドーム型の野手）に走りがち。大型野手育成の余裕がない
- 資金力も潤沢とはいえず、FA市場参戦や大型外国人獲得もままならない
- そうこうするうちに、黄金期を支えた主力たちが衰えていく
- 得点力不足を補おうと、ますます野手が小粒になっていく
- 以下、このループ

# 球団全体に負のサイクルは及ぶ

- ・ 歴史のある球団、しかも東海地区で唯一の存在。地元ファンの圧倒的な支持を得てきた。巨人、阪神はアンチも多く、マスコミを含めて批判の対象にもなったが、中日はそうでもなかった。

→ 特殊な地域性に恵まれ、積極的な球団経営をしてこなかった

- ・ 親会社の責任は？

→ フロントに人材を出していたが、球団経営は素人。昔はどの球団もそんなものだったが、時代は変わった。球団経営のプロが求められる中、旧態依然。監督が変わるたびにチーム方針も変わり、職員、スタッフの意欲も低下。

**問題は根深い。でも、光明は見え始めている**

# 2026年、ドラゴンズは変わる！

## ・ホームランウィングの設置

本塁からの距離は最大で6<sub>メートル</sub>近くなり、フェンスの高さが1.2<sub>メートル</sub>低くなることで野球が変わる。本塁打増、得点力アップに期待。

(テラスを設置した他球場の本塁打ビフォーアフター)

	本塁打	被本塁打
楽天	+23	+31
パイパイ	+43	+31
Zozo	+36	+19

# ドラゴンズはどうか 打たれる数も増える？

## 2023～2025年のフェンス直撃弾

1	細川	13本	1	松葉	5本
2	石川昂	8本	1	小笠原	5本
3	ボスラー	6本	3	高橋宏	4本
4	ビシエド	5本	4	藤嶋	3本
5	福永、木下	4本	4	涌井	3本

新外国人ミゲル・サノが加入。MLB通算164発！

# 進む球団改革！

- 嶋ヘッドコーチを招へい
- データ分析、動作解析の積極活用
- 栄養士との連携
- スカウト、編成部門の強化 etc

将来のチーム像を描き、球団主導で計画的、継続的に取り組む

→本来あるべき球団の姿になりはじめた！